



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	思考動詞のテイル形に関する一考察
Author(s)	阿部, 保子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 2, 1-12
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45558
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC002_002.pdf



思考動詞のテイル形に関する一考察

阿 部 保 子

要 旨

思考動詞「思う・考える」等は、一人称主語の文中、ル形で主語の現在の思考、すなはち発話時を表す。それは、発話時で話者の内的思考を認識できるのは、話者以外にはいないからである。

発話時を基準として、発話行為と思考行為とが別々の人によって行なわれ、話者は他者の思考を直接認識することができない二・三人称主語の文では、思考動詞の語彙の意味が変化する。この場合、思考動詞は「食べる・見る・読む・蹴る」等の動作性動詞に、意味上近づく。思考動詞の意味上の変化が原因となって、二・三人称主語の文で発話時を示すには、「思っている・考えている」等のテイル形になる。本稿では、思考動詞の意味上の変化がル形とテイル形というアспект対立を無くすことを、またなぜ動作性動詞に近づくかを明らかにしたい。

日本語教育の場でも、「思う」の語彙の意味の変化を使って、三人称主語と「思っている」の関連を説明することができる。本稿では、「ラオさんは明日晴れると思う」の誤用例を図を用いて説明した。

〔キーワード〕 発話者、思考主体、同一人物、発話時、動作性動詞

1. はじめに

「思う」「考える」をはじめとする思考動詞¹⁾は、一人称主語の文で例えば「私は田中を犯人だと思う。」と言えるが、三人称主語の文「彼は田中を犯人だと思う。」²⁾は不自然になり使えない。「彼は田中を犯人だと思っている。」とテイル形等にしなければならない。では、なぜテイル形にすると、「彼は」のような三人称者を主語にできるのか疑問が湧いてくる。また、「思う」の他に「考える」「信じる」「分かる」等の思考動詞についても、同じことが言えるのだろうか。そこで、本稿では主語が違った場合、思考動詞のル形とテイル形に違いがあることを考察しながら、上述の疑問に答えていきたい。またその結果、発話時を基準にした二・三人称主語の

文（いわゆる助動詞を伴わないで文末で用いられた場合）では、ル形とテイル形のアスペクト対立が無く、テイル形だけになることを明らかにしたい。

2. 思考動詞のル形とテイル形

2.1 思考動詞のル形

本稿では、思考動詞として「思う・考える・信じる・分かる³⁾」を取り上げた。これは、これらの思考動詞が一人称主語の文で発話時にル形で用いられるが、二・三人称主語の文ではル形ではなくテイル形で用いられることが多いので一括して取り上げた。しかし、これらの動詞は意味的な面（意志性・動作性等）、統語的な面（いわゆる助動詞の使い方やモダリティ的使い方等）で個々に違った振る舞いを示す思考動詞である。このような違いがありながら、本稿で敢えて一括して取り上げたのはこれらの動詞のアスペクト対立の有無、すなわちル形で用いられるのかテイル形で用いられるのか、対立が有るのか無いのかという観点から考察していきたいと考えたからである。

まず最初に、一人称主語の文から考えていきたい。この場合、思考動詞のル形は話者＝一人称主語の発話時での思考を表すと考えられているが、以下の用例を見てみよう。（用例出典については、書名の最初の文字を示し、数字は頁数である。これらの無いものは筆者の作例である）

- (1) 「うん。俺もそう思う」 (虹 247)
- (2) 「うん。そうかもしれない。一私、しばらく様子を見ていようと思うの。」 (花 265)
- (3) 「そんなこと言ったって、他人の気持ちを考えるわ」
- (4) 「オレは彼の言葉を信じるよ」
- (5) 「定期券と身分証明書が入った。写真が張ってあって、名前と住所も分かる」 (僕 18)

用例として挙げた「思う・思うの・考えるわ・信じるよ・分かる」は(3)(5)で、その主語が述べられていないが、「思う・考える・信じる・分かる」主体が話者であることは、これらの動詞の意味や内容から容易に推測できる。しかし仮に、主語を話者以外の者にして、文を言い替えてみると、どうなるであろうか。

- (1) * 「彼もそう思う」 (*は、不自然な文を表す)

(2) * 「あなたは、しばらく様子を見ていようと思うの。」

(「思うの。」が疑問を表す文の場合は不自然な文とはならないが、今は、その場合を除いて考える。)

(3) 「あずささんは、そんなこと言ったって、他人の気持ちを考えるわ」

(4) 「愛ちゃんは、彼の言葉を信じるよ」

(5) * 「写真が張ってあって、君は、名前と住所も分かる」

(1) (2) (5) の用例は、「思う」「分かる」で文を終えずに、「思っている」「分かっている」にしなければ、あるいは、「思う」「分かる」の後に「はずだ」「でしょう」「だろう」「ね」「よ」等を加えなければ、不自然だということを示している。他方、(3) (4) の用例を見ると、主語の「あずささん」「愛ちゃん」でも文は不自然にならない。しかし、これは「あずささんなら、…」 「愛ちゃんなら、…」 という仮定の文と考えるか、あるいは「いつも、…考える・信じる」という習慣等を示す文に、「わ」「よ」という話者の判断を加えた文と考えるのが妥当である。(3) (4) の用例はやはり、テイル形にして次のようになる。

「あずささんは、そんなこと言ったって、人の気持ちを考えているわ」

「愛ちゃんは、彼の言葉を信じているよ」

三人称主語の文については次節で考察するので、次に一人称主語の文での行為の時について見てみよう。

「俺もそう思う」「私、…思うの」「…考えるわ」「…信じるよ」「…分かる」の主体は、先に述べたように話者であるが、その行為の時間はいつであろう。用例をテイル形に替えて、ル形とテイル形を対照して考えてみたい。

(1) 「俺もそう思っている」

(2) 「一私、しばらく様子を見ていようと思っているの。」

(3) 「そんなこと言ったって、人の気持ちを考えているわ」

(4) 「オレは彼の言葉を信じているよ」

(5) 「写真が張ってあって、名前と住所も分かっている」

テイル形の動詞は、「いつも、常々、前々から、すでに」等と一緒に用いられ、「…いつもそう思っている」「…常々考えているわ」「…すでに分かっている」等の文になることが多い。

他方、(1)~(5)の「…思う」「…思うの」「…考えるわ」「…信じるよ」「…分かる」は、「今」という語と共起できることから、発話時を含むと考え

られる。すなわち、発話時での話者の思考活動を示しているといえる。それは、発話時で話者の内的思考活動を把握できるのは、話者自身しかいないことから説明できると思う。「いつも、常々、…」や「今」という共起する副詞から考えて、テイル形では、発話行為時を含む持続した時間での思考活動を、あるいは思考活動の結果の状態が持続していることを示している。この持続した思考活動と結果状態の持続という意味から、テイル形に何か丁寧さ等のムード的側面があるかのように考えられることがある。谷口（1997：143）にはテイル形のムード的側面に関する記述がある。以下に引用すると、「…テイル形には、単なるアスペクトにとどまらず、ある文脈、状況下において、聞き手に対する話し手のある種の心理的配慮を含意したり、発話に儀礼的な表現効果をもたせたり、出来事を客観的に述べ立てたりといった、話し手の何らかの気持ち、心的態度（ムード）を反映する場合がみられるように思う」とある。しかし、この点については筆者には疑問に思われるが、これ以上考察する余裕がないので、稿を改めて述べたい。

2.2 思考動詞のテイル形

一人称主語の文では、前節で、ル形で話者の発話時での思考活動を示し、テイル形で、発話時を含む持続した時間の中での思考活動と、思考活動の結果状態の持続という二面を示すことを見た。次に、この節では二・三人称主語の文（疑問文を除く）でのテイル形を考えてみたい。

(6) 「しかし、村上さんは、あると思っているよ」 (失 97)

(7) 「君は彼が犯人だと思っているな」

(8) 彼は一番むずかしい問題が片づいたと考えている (日 151)

(9) 「君は信じなくても、親というのは期待するし、世間はもっと盲目的に信じてるからね。」 (太 397)

(10) 田中先生が生徒のことを、一番よく分かっている (日 554)

(6)～(10)の思考動詞によって表される思考の行為時はいつであろうか。発話時であろうか、それともいつとは限らない時間帯、すなわち発話時を含む持続的な時間帯であろうか。ここで前節で述べた、発話時に話者の内的思考活動を把握できるのは話者しかいないということを想起したい。このことを考えれば、思考動詞には自ずと意味上の制約⁴⁾があることが分かる。すなわち発話主体と思考主体が同一人物（一人称話者）であるときのみル

形で、発話時を示すことができる。この制約については、中右（1994：51）と高橋（1985：66）の考察に多くを負っているが、ここに詳細を引用する余裕がないので、先を急いで思考の行為時について考えていきたい。思考動詞の意味上の制約についてであるが、他者（ここでは「村上さん」・「君」等）の内的思考を発話時に把握することは不可能であるから、用例(6)～(10)の思考行為時は、発話時と限ることができなくなる。では、いつであろうか、もう少し考察を続けたい。用例の思考動詞をル形にし、その後に話者の心的態度を表すムード形式「だろう／ちがいない」を添えてみよう。

（他の語でもいいがここではテイル形との違いを見るため「だろう／ちがいない」を選んだ）この場合、文末の「よ」「な」「からね」の表すムード的側面については、テイル形とル形との違いを考察する上で、根本的な影響を与えるものではないと思うので本稿ではそのまま加えて行きたい（(6)～(10)の用例の場合も同様に考える）。

(6) 「しかし、村上さんは、あると思うだろう／思うにちがいない よ」

(7) 君は、彼が犯人だと思うだろう／思うにちがいない な

(8) 彼は一番むずかしい問題が片づいたと考えるだろう／考えるにちがいない

(9) 「…、世間はもっと盲目的に信じるだろう／信じるにちがいないからね。」

(10) 田中先生が生徒のことを一番よく分かるだろう／分かるにちがいない

(6)～(10)の思考動詞＋ムード形式は、話者の発話時ではなくて、発話時より後、すなわち、仮定の世界における発話という未来時を表している。この点と、先に考察した発話主体と思考主体とが異なる場合はル形で発話時を示さないことから考えて、二・三人称主語の文において「思う・考える・信じる・分かる」の思考動詞は、その語彙的意味が、状態的なものから「食べる・見る・読む・蹴る」等の動作性動詞に見る動作的なものに近づいていっていることが考えられる。「食べる・見る」等の動作性動詞は、語彙的意味から、ル形で基本的には発話時を示さず、またテイル形で基本的には持続的動作を示す。⁵⁾このことから考えて、用例(6)「村上さんは、…思っているよ」(7)「君は…思っているな」(8)彼は…考えている(9)「…世間は…信じているからね」(10)田中先生が…分かっているの下線部のテイル形で示される思考の行為時は発話時を含む持続的な時間帯と考えられる。

では、二・三人称主語の文で、内的思考を表す「思う・考える・信じる・分かる」が、なぜ動作性動詞に意味上近づくのであろうか、次節で考えてみたい。

2.3 二・三人称主語文のテイル形の意味とアスペクト

二・三人称主語の文（二人称疑問文を除く）において、「思う・考える・信じる・分かる」主体はもちろん二・三人称主語である。用例(6)～(10)では、それぞれ「村上さん・君・彼・世間・田中先生」である。しかし、それらの文を発話しているのは発話者であり、二・三人称主語ではない。ここに思考動詞が動作性動詞に近づく理由がある。思考主体である二・三人称者と発話主体である話者とは、同一人物ではない。同一人物の場合は、思考活動という内的活動性（状態性）の意味が同一人物のため拡大するが、同一人物でない場合は、二・三人称者の思考という外的活動性（動作性）のみが、意味上拡大すると考えられる。なぜテイル形になるのかを考える鍵はここにある。「食べる・見る」等の動作性動詞は、基本的にはル形で発話時＝現在時での行為を示さない。テイル形で、基本的には発話時＝現在時を含んだ持続した時間帯での行為を示す。この動作性動詞と同じように、現在時での二・三人称者の思考活動を言う場合は、ル形ではなく「思っている・考えている・信じている・分かっている」というテイル形で表され、話者の発話時より以前からの持続的動作として話者により認識され報告されると考えていいのではないだろうか。

また「思っている・考えている」等の持続的思考行為は、状態としてもとらえられる。「思っている・考えている」等の状態は、話者や他の第三者にとって容易にあるいは客観的に観察できる状態である。このことから、大江1975ではテイル形が、主観的な動詞を客観化すると考えられたのであろう。⁶⁾しかし、客観的に観察できる状態であるから「思っている・考えている」等のテイル形になるのではない。

次にアスペクトの面を見てみよう。二・三人称主語の文において、発話時を基準にした場合、ル形・テイル形の対立がないことは、前節の考察から理解できる。すなわち、発話時に内的思考活動を把握できるのは話者だけなので、一人称主語の文では「思う／思っている」等のアスペクト対立が生ずるが、二・三人称主語の文では対立が生じない。しかしタ形・テイタ形はどうであろうか。以下の用例を見てみよう。

- (6) 「しかし、村上さんは、あると思った／思っていた よ」
 (7) 君は、彼が犯人だと思った／思っていた な
 (8) 彼は一番むずかしい問題が片づいたと考えた／考えていた
 (9) 「..、世間はもっと盲目的に信じた／信じていた からね」
 (10) 田中先生が生徒のことを一番よく分かった／分かっていた

用例からタ形でもテイタ形でも自然な文になるので、アスペクト対立があることが分かる。思考活動が過去になると、アスペクト対立があるのは、発話時における発話者あるいは非発話者の内的思考活動という点より、発話時以前の二・三人称主語の思考活動を発話者が、過去の、あるいは過去のある期間の、または過去から発話時までの期間の思考を、実態＝事実として、外的な思考動作として捉え報告するからと考えられる。

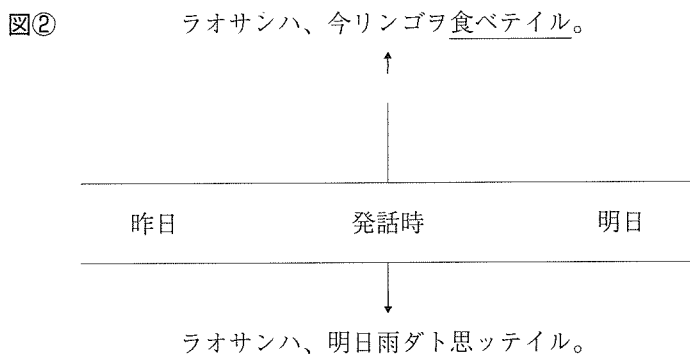
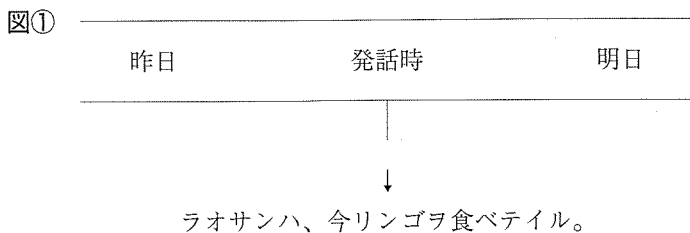
2.4 日本語教育でのテイル形の扱い方

本稿の最後に、日本語の「思う」と英語の ‘think/feel’ とを対比しながら、日本語学習者の「～と思う」文の指導例を考えてみたい。日本語学習者には、英語を母語あるいは媒介語としない者も多くいるが、本稿では筆者が比較できる言語として英語だけを取り上げた。

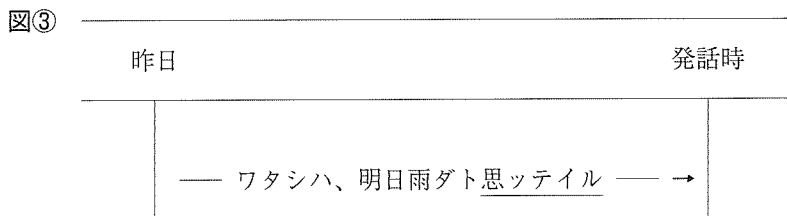
日本語教室で、「私は、明日雨だと思う。」の文を作った学習者が、続いて、「ラオさんは、明日雨だと思う。」という文を作ってしまうことがよくある。特に、英語を母語とする学習者にとって、“Rao-san thinks that it will rain tomorrow.” に対応する文「ラオさんは、…思う」が、なぜ不自然な文であるのか理解できないと思う。英語では、think/feel (思う), think (考える), believe (信じる), see/understand (分かる) の主語は、一人称とは限らないからである。

英語を母語あるいは媒介語とする学習者には、日本語の「思う・考える・信じる・分かる」が、内面の思考活動を示し、話す人と思考する人とが同一人物のとき、そして発話時と同時のときのみ、ル形で表されることを強調する必要がある。さらに、二・三人称主語の文（疑問文を除く）では、話す人と思考する人とが同一でないので、「(私は) 思う」に対して、「彼／彼女は思っている」とテイル形で表すことを、また、それが現在時＝発話時を示すことを、動作性動詞「食べる・見る・読む」等を用いた例：「ラオさんは今りんごを食べている」等と比較しながら、理解させる必要があると思う。以下に図①～③を使って、指導の例を示してみたい。

まず図①を描き、動作性動詞「食べる」と「食べている」の違いを、発話時、昨日、明日の時制上の語を使って説明する。



次に、図②で「食べている」と「ラオさん～思っている」が発話時を含む動作であることを確かめてから、「わたしは、～思う」が発話時での動作であることを教える。この時、一人称主語の文の「思う」と二・三人称主語の文の「思う」とでは思う主体が違うので、語の意味が変化したことに触れたほうが、学習者にとって分かりやすいと思う。



ワタシハ、明日雨ダト思ッタ。 ワタシハ、明日雨ダト思ウ。

図③では、「わたしは、明日雨だと思っている」は昨日のような過去か

ら発話時（今）まで、ずっと「思う」行為が続いている意味であることにも言及し、一人称主語の文の「思っている」と二・三人称主語の文の「思っている」との違いを、図で示したならば、日本語学習者は「思う」という動詞の語彙の意味が、「食べる」等の動作性動詞の語彙の意味と違うことに気が付くのではないだろうか。

3. おわりに

本稿では、2.2節で、二・三人称主語の文の思考動詞「思う・考える・信じる・分かる」は発話時を含む場合、ル形ではなく動作性動詞のようにテイル形で表され、持続した時間帯での思考活動を示すことを述べた。また2.3節では、前記の思考動詞は、思考主体と発話主体とが違うため、思考主体の動作性が意味上拡大して、「食べる・見る」等の動作性動詞に近づくことを述べた。このことから次のような点が明らかになった。二・三人称主語の文では、発話時において動詞の意味上の変化、すなわち思考主体の動作性が発話主体（話者）と切り離された形で拡大する。この場合動作性動詞と同じように、ル形ではなくテイル形で表される。従ってアスペクト対立が無くなる。動詞の意味上の変化によってアスペクト対立の有無に変化が生ずるという点が、筆者が本稿で明らかにしたい点である。さらに最後の節では、日本語学習者の「～と思う」「～と思っている」文の指導例を簡単ではあるが、図を使って述べた。

本稿では、思考動詞を「思う・考える・信じる・分かる」に限って考察したが、互いの意味的相違まで考察する余裕がなかった。また他にも「疑う・察する・祈る・期待する・願う・望む」等の思考動詞と呼ばれる動詞があるが、これらについては今回取り上げなかったので、別の機会に取り上げたいと思う。

筆者には、「思う」のモダリティ的働きについて述べた小論⁷⁾があるが、今回はそれについて触れなかった。しかし、テイル形にモダリティとしての働きがあるとする考え⁸⁾も谷口1997の他にあるので、今後はテイル形のモダリティ的働きの面を考察していきたいと考えている。

注：

- 1) 思考動詞とは、人間の内的な思考に関する動詞で、「思う・考える・信じる・分かる」の他に「疑う・祈る・願う」等の動詞をいう。思考動

詞を内的情態動詞とする考え方－工藤（1995：76）－もある

- 2) 用例は、小説の地の文を除いた。小説の地の文では、話者＝一人称と第三者＝三人称との対立がない場合が多いからである。
- 3) 「分かる」は「～が分かる」と「が」格を取ったり、またモダリティ的にも他の思考動詞と異なるが、テイル形の使われ方や思考という動詞の意味面を考えて同様に扱った。しかしアスペクトの面からは、高橋（1985）では「おもう」「かんがえる」「信じる」「気になる」などを一つのグループに置いて、「分かる」は記されていない。
- 4) 思考動詞の意味上の制約とは、中右（1994）で示された認識論的な原理（下記参照）と高橋（1985）で示された「アスペクト性からの解放」という点から、筆者が考えた制約である。

中右（1994：51）には、以下の記述がある。「瞬間的現在時における接触可能性の原理－発話時点と瞬間同時に発現する心的態度のうちで、話し手にとって接触可能な情報となりうるのは、ただひとつ、話し手自身の心的態度だけである。」

高橋（1985：66）には、以下の記述がある。「…一人称現在のばあいはおもいながらはなすのであり、思考活動としての内言と表現活動としての外言が分化していない。まさに、そのことばが思考活動と表現活動の統一として存在するのである。話し手の現在の思考活動の表現がアスペクト性をもちえないのは、そのためである。」

- 5) 動作性動詞の中で、「食べる・見る・読む・蹴る」を取り上げたのは、テイル形のアスペクトの意味と、動詞の語彙の意味の相関性を述べている工藤（1995：54）の分類（主体動作動詞）に依った。
- 6) 大江（1975：218）には、「アスペクトは動詞が表す行為……純粹主観についてこれを反省的に客観化する。」との記述がある。
- 7) 阿部（1996）
- 8) 井上（1990a）

参考文献：

- 阿部 保子（1996）「思考の動詞「思う」とその主語の人称に関する一考察」
東海大学日本文学会編『湘南文学』30号 pp. 146－156
- 井上 和子（1990a）「「－ている」とモーダリティ」神田外国語大学『研究報告（6A）日本語の普遍性及び個別性に関する理論的及び実証的研究』

pp. 21-35

大江 三郎 (1975) 『日英語の比較研究－主観性をめぐって』 南雲堂

工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語
の時間の表現－』 ひつじ書房

高橋 太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版

谷口 秀治 (1997) 「テイル形に関するムード的側面の考察」 『日本語教育』
92号 pp. 143-152

中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』 大修館書店

堀川 智也 (1991) 「心理動詞のアスペクト」 北海道大学言語文化部 『言
語文化部紀要』 21号 pp. 187-201

用例出典：

虹：『虹に向って走れ』 赤川次郎1990角川文庫／花：『花嫁は歌わない』

赤川次郎1989角川文庫／僕：『僕らの課外授業』 赤川次郎1984角川文庫／

矢：『失われた少女』 赤川次郎1988角川文庫／日：『日本語基本動詞用法

辞典』 小泉保他編1989大修館書店／太：『太郎物語（大学編）』 曾野綾子
1979新潮文庫

あべ やすこ（留学生センター非常勤講師）

A study of the "te iru" form of verbs of thinking

ABE, Yasuko

The purpose of this study is to identify the differences between the "te iru" and "ru" forms of verbs of thinking, *omou/kangaeru/shinjiru/wakaru*, used in first-person vs second- or third-person subject sentences.

In first-person subject sentences, where the speaker is the thinking person, "ru" forms are commonly used.

In second- or third-person subject sentences (except question sentences), where the speaker is not the thinking person, the verbs change their meaning and behave similarly to action verbs such as "*taberu/miru/yomu/keru*" etc. With action verbs, the "ru" form does not refer to the time of speaking; this is done by the "te iru" form. The "te iru" form of thinking verbs, in second- or third-person subject sentences, similarly refers to the time of speaking. This difference leads to the use of the "te iru" form in sentences like "*Rao-san wa ashita ame da to omotte iru*".